# 自他の命を大切にする子どもを育てましょう

**人の命を奪うことは人権侵害の最たるものです。**

学校裏サイトと呼ばれるインターネット上で、ある特定の人に対して「死ね」とか「キモイ」などの誹謗中傷が書き込まれ、それが陰湿ないじめや傷害事件となるなど大きな社会問題となっています。

また、若者がまったく見知らない人の「命を奪う」という事件が3月から4月にかけ、相次ぎました。それも、自分本位の考えからのことです。人の命を奪うことは人権侵害の最たるものです。決してあってはならないことです。たった一つしかないかけがえのない命、命の尊厳をしっかりと受け止め、命への畏敬の念を抱く子ども、若者であって欲しいと思います。

**命の尊厳は命に触れて体得します。**

筆者の父は10数年前に亡くなりました。生前から「我が家で死を迎えたい」と言っていた父は、長年住み慣れた我が家で死を迎えました。

家族や親族に囲まれて眠るがごとく息をひきとりました。息をひきとるまで、母は、両手で父の手をしっかりと握りしめ、無言で父を見つめていました。親族は父の名前を呼び続けました。子たちは「父ちゃん、父ちゃん」と、孫たちは「おじいちゃん、おじいちゃん」と呼び続けました。次第に冷たくなる父の手や足をみんなで必死でさすりました。筆者は、「父ちゃん、これまでありがとう。これからも俺たちを見守ってはいよ」とこみ上げる悲しみをこらえながら父に語りかけました。息をひきとると、みんながわっと泣きながら父の体を抱きしめました。

人は、このように家族や親族、友人の死にふれるたびに、自らが生かされていることの価値を自覚します。動物の出産や産卵、死を目撃したり、親が子を大切に育てる姿にふれる中で無意識の内に命の尊厳を学びとります。

**現実の命から学ぶ機会を数多く作りましょう。**

ある人から聞いた話です。

ペット商店で買ったカブトムシが死んだとき、「お父さん、カブトムシの電池が切れた。電池を替えて」と子どもに言われて愕然とした。数日後の早朝、子どもを連れてクヌギ林へカブトムシを採りに行った。あちこち探し回って採集したカブトムシが死んだとき、「お父さん、カブトムシが死んだ。お墓を作ろう」と子どもが言ったそうです。

このような命を現実のものと受け止める機会を数多く作りたいものです。

また、人が生きるためには牛や馬、野菜など動植物の命をもらわねばならないことなど、命の持つ矛盾に気づかせ葛藤させるとともに命への感謝の心をも育てたいものです。

子どもたちがこのような現実の命について学ぶなかで、命の尊厳、命への畏敬の念をはぐくみ自他の命、人権を大切にする心豊かな人に育って欲しいと思います。

**益城町教育委員会**

---

ふるさとの地名漫歩

# 歴史の変遷と地名 298

益城四山は東から城山（四八〇・四㍍）朝来山（四六九・五㍍）船野山（三〇七・八㍍）飯田山（四八一・二㍍）と連なり、それぞれの歴史を秘めています。その内朝来山は先に紹介しましたが、今回は城山（ジョウヤマ）です。

古代、城砦は柵（キ）と言い城（キ）城（シロ）となり、城（ジョウ）とも変わります。

上益城郡誌は益城の語源を萬志岐（マシキ）の名は朝来名峰の土蜘蛛退治のころ出来た。健緒組は土蜘蛛の降兵収容の為に柵（キ）を作ったが、威勢に恐れて続々と投降するため柵を建て増した。つまり増柵で「萬志岐」となり風土記編纂時、地名は好字の二字を採れとの命で「益城」となった。果たして如何と地名伝説を紹介しています。

一、城山は土蜘蛛の砦跡と考えても肝心の風土記に何の記録もなく伝承もまったくありません。

二、キを生とすると自然の草木成長、生命の根源、また木の精霊、木魂の意味（民俗地名語彙事典上）で、大木が繁茂する木霊の宿る聖なる山となる。

三、キを鬼と解釈すると、オニという国語は隠（オン）の古語で古代にはオニは山の精霊（山の神）・土地の精霊、荒ぶる神を代表する一呼称（オオヒト）であったし、また山男、大人（巨人）など山に住む人々もオニに含まれた。

後に漢土の民間信仰の鬼（キ）や仏経の地獄の鬼が習合され今の鬼が生まれ、また人の死者の霊魂ともされた（民俗学辞典）。

とすれば城山は鬼山（キヤマ）となり、二と三とが複合し土蜘蛛の山男伝説も包含反映した鬼（神々・先祖の霊魂）が宿る「聖なる山」との意味になります。

役場屋上より望む朝来山と城山

**益城町文化財を訪ねる会　会長　松野國策**